

氏名	BALPINAR METIN
学位	博士
専門分野の名称	文学
学位授与番号	博甲第 4599号
学位授与の日付	平成24年3月23日
学位授与の要件	社会文化科学研究科社会文化学専攻 (学位規則(文部省令)第4条第1項該当)
学位論文題目	現代トルコ語指示詞の研究
学位論文審査委員	主査・教授 和田 道夫 教授 宮崎 和人 教授 栗林 裕 准教授 片桐 真澄 准教授 金子 真

学位論文内容の要旨

本論文は、現代トルコ語指示詞の研究に一定の統語論的視点を新たに導入することによって、従来のトルコ語指示詞研究には見られなかった新しい指示詞体系の構築が可能になることを主張し、その帰結を詳細に論じたものである。

第1章では本研究の位置づけとその目標とするところについて述べ、第2章においては当該分野の先行研究を概観し、その問題点を様々に指摘した。第3章では、現代トルコ語指示詞の非文脈指示用法について述べ、同用法が「共通の空間」と「聞き手による認識」という一組の素性を用いて分析することが可能であることを論じた。又、現代トルコ語指示詞の非文脈指示用法に観察される様々な興味深い特性が、上述の素性分析の当然の帰結として導き出されることを論証した。第4章では、現代トルコ語指示詞の文脈指示用法を取り上げ、その非照応指示用法の場合について論じた。「管理可能な領域」性という概念を導入することにより、従来「話し手からの距離」という「現場指示」性の観点から分析されてきた非照応型文脈指示用法の研究に新しい展望を与えるとともに、文脈指示用法指示詞の本質的な特性は「現場指示」性の概念では十分に説明できないことを明示的に論証した。第5章では、現代トルコ語指示詞の照応型文脈指示用法を取り上げ、現代トルコ語指示詞 bu, o には文照応形としての機能が働いていることについて論じた。更に文学作品等に観察される具体的なデータを基にして bu は「非開放文」(non-open sentence) を、一方 o は「開放文」(open sentence) を先行指示要素として要求することを統語論及び統語形態論の観点から詳細に立証した。又、文照応形としての bu, o が持つ先行指示要素の特性の違いを利用することによって、何故一組のトルコ語指示詞のうち o だけが、文照応形としての機能に加えて名詞句照応形としての働きも合わせもつのかという、いわゆる「Bastuji の問題」についても一定の説明を与えることが可能になることについて論じた。第6章では現代トルコ語指示詞の文脈指示用法において顕著に観察される省略用法を取り上げ、bu 単独型は全て省略用法に由来するものであること、一方 o 単独型には省略用法に還元することができない独立用法が存在していること、又省略用法においては bu 単独型だけが例外的に「現場性」の条

件に従うことを指摘した。更に、省略用法に見られるこうした指示詞用法の特異な分布の差が、本論文が想定する言語計算システムの枠組みが与えられるならば、削除という統語操作及び先行発話文脈への統語的依存度に基づく指示詞用法の階層性から導き出すことができる帰結として述べるができることを論証した。最終章である第7章は本論文の内容を総括するものとなっている。

以上本論文の内容を概観したが、本研究の大きな特徴と貢献の一つは、従来「現場指示」性や「現場指示」性の帰結の一つである「話し手と指示対象の相対的距離」という概念を中心に分析されてきた指示詞研究に、指示詞の統語分析という新たな視点を導入することにより「現場指示」性の役割と限界を明確にする一方で、これまで「現場指示」性という概念では十分に捉えることのできなかつた様々な現象を観察・記述することを可能にし、又同時にそうした現象に対して興味深い説明を与えることをも可能にする新しい指示詞研究の枠組みを具体的に提示した点にあると言える。本論文の成果の一部は、第3章が「東京大学言語学論集」(第30号)に、第4章が「アジア・アフリカ言語文化研究」(第83号、東京外国語大学)に、第5章が「京都大学言語学研究」(第30号)にそれぞれ掲載されており、これらの研究誌がいずれも当該研究分野において国際的に評価の高い一流の学術誌であることを考えるなら、本論文の論考が極めて高い水準の論考であり、同時に本論文筆者が博士後期課程早期修了にふさわしい優れた研究者であることを保証するものとなっていると言える。

学位論文審査結果の要旨

本論文審査は、2月13日午後4時より総合研究棟2・4演習室において、主査和田道夫、副査宮崎和人、同栗林裕、同片桐真澄、同金子真の計5名の審査委員により行われた。審査結果は以下に報告する通りである。

従来「現場指示」性や「現場指示」性の帰結の一つである「話し手と指示対象の相対的距離」という概念を中心にして分析されてきた現代トルコ語指示詞研究に指示詞の統語分析という新たな視点を導入することにより、(i)「現場指示」性という概念では十分に捉えることのできなかつた様々な言語現象を観察・記述することを可能にすると同時にそうした現象に対して興味深い原理的な説明を与えることをも可能にする指示詞研究の新しい枠組みを具体的に提示し、その帰結を詳細に論じた点に本論文の当該研究分野における評価と貢献が存在すること、又(ii)本論文がその構成及び論考の全体にわたって優れた独創性と一貫した論理性・体系性を有することの以上2点について、審査委員全員の賛同と高い評価が得られた。具体的には、観察・記述レベルにおける本論文による当該研究分野への大きな寄与としては、(i)現代トルコ語指示詞 bu, o が文照応形としての機能を持ち、先行指示要素が「非開放文」(non-open sentence)である場合に bu が用いられ、先行指示要素が「開放文」(open sentence)である場合に o が選択されることを、文学作品等の言語資料の注意深い観察に基づいて指摘し、統語論及び統語形態論の観点からこれを立証したこと、(ii)指示詞の省略現象の組織的な観察から、指示詞 bu の独立用法は全て省略用法に由来するものであり、一方指示詞 o の独立指示用法にはそのような省略を想定することができない場合が存在することを指摘し、こうした指示詞 bu, o の分布の差が指示詞 o に顕著に観察される名詞句照応形としての働きを保証していることを統語的削除操作の観点から論証したこと、等の点を挙げるができる。一方より高次の説明レベルにおける本論文による当該研究分野への重要な貢献としては、(i)従来個別の現象として記述されてきた非文脈指示用法の多

様な指示詞分布が「共通の空間」と「聞き手による認識」という一組の素性を利用した交差分
類分析を用いて原理的に説明可能であることを立証したこと(第3章)、(ii) 従来「話し手と
指示対象との相対的距離」という現場・直示性 (deixis) の条件を用いて一律に述べられてき
た指示詞分布が、非文脈指示用法の場合と文脈指示用法の場合とでは、その分布を大きく
異にすることを指摘し、後者の場合における指示詞分布が「管理可能な領域」性条件により
予測可能であることを論証したこと(第4章)、(iii) 現代トルコ語の一組の指示詞のうち、あ
る特定の指示詞だけが同時に名詞句照応形としても機能するのは何故であるかといういわ
ゆる「Bastuji の問題」に対して、指示詞の持つ文照応用法の機能に着目し一定の解を与える
ことに成功していること(第5章)、(iv) 省略を伴う独立指示用法の場合、指示詞 bu と o の
間に「現場指示」性のへの依存度に関して大きな差異が観察されることを指摘し、そうした
差異が本論文の想定する現場・直示性スケール (deictic cline) に還元可能であることを論
証したこと(第6章)、等が挙げられる。なお本論文の第3章、4章、5章はそれぞれ、「東
京大学言語学論集」(第30号)、「アジア・アフリカ言語文化研究」(第83号、東京外国語大学)、
「京都大学言語学研究」(第30号)に掲載されており、そのことが本論文の水準の高さを保証
するものであることは審査委員全員が認めることである。

本研究の問題点としては、「管理可能な領域」性の条件が現状のままでは十分に機能しな
いのではないかという指摘を受けた。本論文筆者は「管理可能な領域」を「話し手の主体的
なコントロールが及ぶ領域」と定義付けており、その意味では指示対象が同時に複数の領域
内に存在し、かつその領域の一方が定義上「管理可能な領域」であり、他方が「管理可能な領
域」でないという事態は十分に想定できる。そのような場合に、「管理可能な領域」性条件
は指示詞分布の決定にあたってどちらの領域を優先するのかということが当然問題となる。
ここで重要なことは、そうした事態においてトルコ語母語話者の指示詞選択が常に一定で
あることを考えるならば、「管理可能な領域」性の優先順序の決定が話し手個々人の恣意的
な判断に委ねられているのではなく、そこに何らかの一組の原則が働いているのだらうと
想定せざるを得ない。従って、問題は指摘された「管理可能な領域」性条件の個別の定義自
体にあるのではなく、複数の「管理可能な領域」が定義上与えられた場合、指示詞選択の決
定に当たってどの領域がより大きな言語的有意義性 (linguistic relevance) を持つのかとい
う領域性一般の問題にかかわることがらであり、その意味では必ずしも本論文に固有な問
題とは言えないが、今後検討すべき興味深い重要な話題の一つであることは審査委員の指
摘の通りである。以上の他にも、文法用語の呼称の問題、「共通の空間」の定義の変更とそ
れに伴う呼称の問題、「管理可能な領域」性条件と神尾の「情報のなわばり理論」との異同に
関する問題、非文脈指示用法における独立形の分布の問題等が指摘された。これらの問題
はいずれも今後より優れた指示詞体系の構築を目指していく上で検討を重ねるべき問題で
あると思われる。

以上本論文審査内容についてその要旨を述べてきたが、審査委員会は本論文が博士学位
論文として十分な水準に達していることについて全会一致で合意した。